

O13-072

乳児の気質と育児ストレスとの関連における母親の対処戦略がもつ間接的な効果

三輪 桂子^{1,2)}、玉置 美春³⁾、松原 早希⁴⁾、
本田 育美⁴⁾

¹⁾名古屋学芸大学看護学部看護学科、²⁾名古屋大学大学院
医学気研究科総合保健学専攻 博士後期課程、

³⁾藤田医科大学保健衛生学部看護学科、

⁴⁾名古屋大学大学院医学気研究科総合保健学専攻

目的：子どもの難しい気質は、育児ストレスを持続させ、時間経過とともに悪化させる可能性があるため、子どもの気質に起因する育児ストレスの早期予防が必要である。母親が子どもの行動的／感情的な問題を認識するとき、母親の対処戦略次第で、育児ストレスが軽減／悪化すると報告があるが、乳児の母親では不明である。母親が乳児を難しいと感じても、対処戦略次第で育児ストレスは抑えられると考えた。本研究は、乳児の母親を対象に、乳児の気質と育児ストレスとの関連において、母親の対処戦略がもつ間接的な効果を検討することを目的とした。方法：2024年2月にWebアンケートによる横断調査を行った。対象は18歳以上で産後9～12か月の初産婦とし、700名から回答を得た。調査内容は、母児の基本的背景、乳児の気質(IBQ-R SF)、母親の対処戦略(Brief COPE)、育児ストレス(PSI)である。IBQ-R SFは「否定的な感情(NE)」と「方向性／調整能力(O/R)」の2因子、Brief COPEは「問題焦点型」「回避型」「支援希求型」の3因子で分析し、PSIは「子どもの側面」と「親の側面」のストレスに分けた。分析方法は媒介分析を用いて間接効果の検証を行った。本研究は名古屋大学生命倫理審査委員会の承認(23-111)を得て実施した。結果：NEは回避型と有意に関連した($\beta=0.114$)。O/Rは支援希求型($\beta=0.250$)と回避型($\beta=-0.297$)に有意な関連があった。NEと子どもの側面のストレスとの関連では、回避型が有意な間接効果を示した(Indirect Effect(IE)=0.058)。NEと親の側面のストレスとの関連では、回避型が有意な間接効果を示した(IE=0.038)。O/Rと子どもの側面のストレスとの関連では、支援希求型(IE=-0.001)と回避型(IE=-0.107)が有意な間接効果を示した。O/Rと親の側面とのストレスとの関連では、回避型が有意な間接効果を示した(IE=-0.069)。考察：乳児の気質と育児ストレスとの関連において、母親の対処戦略の間接的な効果を示した。乳児の泣き声や不機嫌な態度は、母親の関わりを避ける傾向を増加させ、育児ストレスを高める可能性がある。穏やかで落ち着いている乳児はストレスの原因となる行動が少ないため、母親は回避的な対処をする必要が少なく、育児に関するストレスがかかりにくいといえる。この結果から、乳児の気質に対する母親の受け止め方や対処戦略を把握し、母親が回避型対処に偏らないような支援が育児ストレス抑制に有効であると示唆された。

O13-073

アタッチメント評価項目の比較・分析～養育により改善されやすいもの・改善されにくいもの～

新宅可奈子

社会福祉法人四恩学園 四恩みろく乳児院

＜目的＞ アタッチメントとトラウマ等のアセスメント尺度の作成を目的に乳児院を対象に実態調査(2017～2019粘土)が行われ、その再分析されたものが先日報告された(子どもの虹情報研修センター『2023年度研究報告書』)。当施設でも2022年よりアタッチメントを評価するオリジナルの行動観察シートを用いて計測しており、今回はその結果と比較・分析を行った。＜方法＞質問紙：当施設で作成したオリジナル行動観察シート99項目(「子どもの心理面での「SOSサイン(126項目)」より、家族関係と具体的な身体症状などは除いたもの)調査期間：2022年4月～2025年2月対象児：上記期間に当施設に入所した乳幼児39人(平均月齢：18ヶ月±4.0ヶ月)[男子：27人(平均月齢：18.44ヶ月)、女子：12人(平均月齢：17.42)]採取時期：(1)入所時、(2)入所から2週間後、(3)ユニットに移動してから1ヶ月後、(4)(3)から3ヶ月後採点方法：各時期に担当職員とその部屋の責任者の2名に、「よく見られる：○」、「ときどき見られる：△」、「まったく見られない：×」を用いて記入してもらった。分析方法：○を1点、△を0.5点、×を0点として換算し、各時期の2名の職員の平均値を算出し、2023年度研究報告書の結果と比較、分析を行った。＜結果＞ 2023年度研究報告書で、「たまに～よく当てはまる」の回答が20%以上あった項目において当施設での結果と比較したところ、「身体の緊張が強い／ゆるい等、力の入れぐらに心配がある」では、当施設は4%と少ないものや、「言葉の発達・表出など、コミュニケーションの発達で心配な点がある」は22%と同等の割合で当てはまるものがあることが分かった。また項目によっては、調査終了時に改善が見られるものとあまり変化が見られないものとがあり、時間の経過と相関がある項目もあった。＜考察＞ 今回の結果より、アタッチメントの評価項目には、(A)確実に軽減するもの、(B)なだらかに軽減するもの、(C)一時的に増加し、その後軽減するもの、(D)変わりにくいもの、に弁別されることが分かった。中でも、その後の環境や大人との関わりで改善されにくいものがあり、乳児期に適切な養育の欠如や発達特性による影響が考えられるため、児の特性・成長・必要性に応じて療育などの専門的な介入をしていくことが望まれる。